

[資 料]

大学生の障害観に影響を及ぼす要因の検討：
科目「障害児・者福祉」6年間のアンケート分析

河野 喬・舩金 春佳・宮田 純也・鶴岡 和幸・澤屋 真樹

磯邊 省三・相川 貴裕・加地 信幸・大塚 文¹

**Factors influencing university students' perceptions of disabilities: A six-year analysis
of questionnaires from the course "Support system for people with disabilities"**

Takashi KAWANO, Haruka MASUKANE, Junya MIYATA, Kazuyuki TSURUOKA,
Maki SAWAYA, Shozo ISOBE, Takahiro AIKAWA, Nobuyuki KAJI
and Aya OTSUKA

Abstract

This study analyzes responses to a questionnaire on perceptions of disabilities, conducted with 423 students enrolled in the course "Support system for people with disabilities" between 2018 and 2023. The survey examined several aspects: the most associated type of disability ("physical," "intellectual," "mental," "developmental," or "intractable diseases"), the presence of prior interaction with persons with disabilities, the presence of family members with disabilities, scores on disability-related perceptions, and free-text responses to the prompt, "What comes to mind when you think of disability?" Questionnaires were administered at both the first and final sessions of the course. Results revealed differences in the types of disabilities most frequently associated by year of enrollment, as well as factors reducing negative perceptions of disabilities, such as being female and having family members with disabilities. Quantitative text analysis further indicated that the diversity of terms describing disability perceptions in the free-text responses expanded more at the final session than at the first session.

Keywords:

university students (大学生), *perceptions of disabilities* (障害観), *inclusive society* (共生社会),
quantitative text analysis (計量テキスト分析), *foster connections* (つながりをはぐくむ)

1. 序論

共生社会（インクルーシブ・ソサエティ）の実
現がめざされる社会情勢のなかで、障害のある人

に対する偏見や差別の解消が求められている。健
常と呼ばれる人々が障害のある人に抱く抵抗感は、
接触・交流経験の有無によって影響を受けること
が知られており（河内，2006；松本他，2021），障

¹ 広島文化学園大学 人間健康学部

(Faculty of Human Health Science, Hiroshima Bunka Gakuen University)

害のある人のことを表わす表現を工夫することによってポジティブなイメージが促進されることが示されている（栗田他，2010）。

広島文化学園大学には、障害のある人について学ぶ科目が複数開講されているが、人間健康学部は、「障害児・者福祉」（社会福祉士養成課程における「障害者福祉」）が専門教養科目群の専門コア科目として置かれている。主には、社会福祉士ないしソーシャルワーカーとして求められる多様性の尊重、エンパワメント等の観点を学ぶ科目となっているが、全学部生が学ぶことになるため、当該科目の履修を通して、上記のようなポジティブなイメージの獲得や、現代的な共生社会に寄与する対人援助専門職としての障害観の醸成につながっているかどうか、定期的な振り返りを行ってきた。

そこで、6年間の履修生による授業内での障害イメージに関するアンケートの分析をととして、学生が抱く障害イメージに影響を及ぼす要因について探索的な検討を行った。

2. 方法

（1）対象者

人間健康学部スポーツ健康福祉学科の学生で、科目「障害児・者福祉」（表1）の履修生を対象として、授業の初回と最終回に質問紙調査を行った。履修学生は、2018年度22名、2019年度17名、2020年度42名、2021年度30名、2022年度169名、2023年度143名、合計423名（男性322名、女性101名）であった。2022年からの履修生の増加は、カリキュラム改正で、必修科目となったことによる。

（2）調査項目

1) 障害者との交流体験と家族

障害児・者との交流体験、関わりについて調べるために、「今まで、障がいのある人と交流したことはありますか」（はい、いいえ）、「障がいのある家族はいますか」（はい、いいえ）の質問項目を置いた。

2) もっとも思い浮かべる障害種別

障害は非常に多義的な概念であることから、前提とする障害状態が一致しないままでの検討は妥当性に問題を抱える。そのため、各履修生がもっとも思い浮かべる障害種別を把握したうえでの分析を行うために、身体障害、知的障害、精神障害、難病（特定疾患）、および発達障害を項目として示し、択一式での回答を求めた。

3) 障害児・者イメージ得点

障害児・者に対するイメージとして、「かわいそう」、「暗い」、「怖い」、「元気がない」、「生活するのが難しい」、「ひとりでは何もできない」、「一緒に生活は難しい」、「（自分は）障害が無くてよかったと思う」、「困っているときは助けたい」、「スポーツをするのはあぶない」、「一緒にスポーツをするのは難しい」といった11項目の質問を置き、回答は、「そう思う」＝5点、「まあそう思う」＝4点、「どちらともいえない」＝3点、「あまりそう思わない」＝2点、「そう思わない」＝1点、の5件法で求めた（得点範囲：11～55点）。得点が高いほど障害に対するネガティブなイメージを抱いていることを表している。

4) 自由記述

履修生が抱く障害に対するイメージを定性的に検討するために、「あなたは『障がい』と聞くと、どのような状態をイメージしますか」という設問を置き、自由記述での回答を求めた。

（3）統計的处理

各調査項目は、集計を行ったうえで、障害児・者のイメージ得点はスコアリングを行い、平均値及び標準偏差を求めた。次いで、授業初回と最終回における履修生の障害児・者イメージ得点の変化をとらえるために、対応のある t 検定を行った。また、障害児・者イメージと性別、もっとも思い浮かべる障害種別、交流体験、障がいのある家族の有無等の関連を確認するために、障害児・者イメージ総得点を従属変数とする重回帰分析

表1 科目「障害児・者福祉」の内容

回	授業のテーマ	講義内容
1	イントロダクション	授業の進め方・目標について、「障害」という言葉がもつイメージについて考える。
2	障害とは	「障害」の多様な見方,「国際生活機能分類」(ICF)への歩み, ICFの特徴, 医学モデルと社会モデル, 相互作用モデルについて考える。
3	障害者の生活実態とそれを取り巻く社会情勢, 福祉・介護需要	データ(地域移行, 就労)からみる現状, ニーズの実態, 事例からみる生活実態について考え, グループワークを用いて深める。
4	障害者福祉制度の発展過程	障害者法制度がどのように発達してきたかについて歴史的背景を踏まえつつ考える。
5	障害者福祉制度の実際(1)障害者基本法他	障害者基本法, 身体障害者福祉法, 知的障害者福祉法, 精神保健福祉法, 発達障害者支援法について考える。
6	障害者福祉制度の実際(2)障害者虐待防止法他	障害者虐待防止法, 障害者差別解消法, 医療観察法, バリアフリー新法, 障害者雇用促進法, その他諸施策について学ぶ。
7	障害者総合支援法の概要	障害者総合支援法の理念・考え方, 自立支援給付, 支給決定のプロセスについて学ぶ。
8	障害者総合支援法の構造, 介護保険法との関係, ミニテスト	自立支援医療費, 補装具, 地域生活支援事業, 障害福祉計画, 苦情解決, 審査請求, 介護保険制度との関係について学ぶ。ミニテストを行う。
9	介護給付と訓練給付	ミニテストの解説, 障害福祉サービスの実態について考える。
10	障害児・家族への支援制度	障害児に対する支援, 障害児福祉施策の現状について考える。
11	障害者自立支援法における組織及び団体の役割と実際	行政機関, 事業者・施設, 国民健康保険団体連合会, 労働機関, 教育機関の役割について学ぶ。
12	障害者自立支援法における専門職の役割と実際	専門職の価値・倫理, 障害者総合支援法に基づく専門職について考える。
13	相談支援事業所の役割と実際	相談支援専門員, サービス管理責任者, 生活支援員, 居宅介護等従業者の役割と実際について学び, グループディスカッションを行う。
14	障害者自立支援法における多職種連携, ネットワーキングと実際	多職種連携の意味, 医療・教育・労働関係機関との連携について学び, ミニテストを行う。
15	学修の振り返り	ミニテストの解説, 及び学修全体のフィードバックを行う。

(強制投入法)を行った。有意水準はそれぞれ5%未満とし、解析には無償の統計解析プログラムHAD version16.20 (清水, 2016)を使用した。

そして、自由記述の分析には、KH Coder 3 オフィシャルパッケージ (樋口, 2020) を用いた。KH Coderは、文をセグメント化し、頻繁に使用される単語をリストアップした後、単語とそれに対応する頻度との関係を示す共起ネットワーク図を作成することができる。本研究では、まず抽出語リストで出現回数の多い単語を確認し、次に出現回数の多い単語の共起関係を共起ネットワーク図によって確認した。授業の初回と最終回の使用語句の変化は、外部変数を「初回」及び「最終回」とする対応分析を行ってその変化を確認した。

(4) 倫理的配慮

本研究は、広島文化学園大学人間健康学部研究倫理指針、及び日本社会福祉学会研究倫理規程に則って計画した。実施にあたって、学生に口頭及び質問紙上で、調査の目的、方法、協力の任意性、及びいつでも協力を中止できること、当該調査に協力しなくても成績評価等には一切影響しない旨を説明し、さらに質問紙上に協力の意向を示す項目を置くことで、それにチェックすることをもって研究への協力の意思を確認した。

3. 結果

1) 障害者との交流体験と家族

対象者の概要を表2に示す。履修生423名のうち、障害のある人との交流体験をもつ者は、313名(74.0%)と多数を占めた。その一方で、障害のある家族がいる者は、35名(8.3%)にとどまった。

2) もっとも思い浮かべる障害種別

2018年から2023年までの6年間では、もっとも身体障害を思い浮かべる学生が多かった(平均58%)。次いで、発達障害(15%)、知的障害(13%)、精神障害(8%)の順であった。難病(特定疾患)

表2 履修生の特徴 (n=423)

項目		
年齢	18.89	± 2.04
性別		
男性	322	76.1%
女性	101	23.9%
障害のある人との交流体験		
なし	70	16.5%
あり	313	74.0%
無回答	40	9.5%
障害のある家族		
いない	338	79.9%
いる	35	8.3%
無回答	50	11.8%

Mean ± SD

表3 質問「障害と聞くと、どの障害状態を思い浮かべるか」の回答結果

どの障害状態を 思い浮かべるか	2018 (n=22)	2019 (n=17)	2020 (n=42)	2021 (n=30)	2022 (n=169)	2023 (n=143)
身体障害	12 (55%)	10 (59%)	23 (55%)	12 (40%)	116 (69%)	101 (71%)
知的障害	5 (23%)	2 (12%)	4 (10%)	4 (13%)	27 (16%)	7 (5%)
精神障害	3 (14%)	0 (0%)	2 (5%)	8 (27%)	2 (1%)	3 (2%)
難病	0 (0%)	0 (0%)	1 (2%)	2 (7%)	0 (0%)	0 (0%)
発達障害	2 (9%)	5 (29%)	12 (29%)	0 (0%)	22 (13%)	15 (10%)
無回答	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	4 (13%)	2 (1%)	17 (12%)
合計	22 (100%)	17 (100%)	42 (100%)	30 (100%)	169 (100%)	143 (100%)

を、障害としてとらえる履修生は2%にとどまった（表3）。

3) 障害児・者イメージ得点

障害児・者イメージについて、授業初回と最終回でそれぞれ収集した結果をもとに、対応のあるt検定を行ったところ、すべての項目に有意な差はみられなかった（表4）。その一方で、イメー

ジ総得点を従属変数として、性別（男性、女性）、思い浮かべる障害状態、障害のある人との交流体験（の有無）、障害のある家族（なし、あり）を独立変数をする重回帰分析の結果は、性別（ダミー係数：男性=0, 女性=1）、障害家族（なし=0, あり=1）に、有意な負の関連が確認された。最も思い浮かべる障害種別、および障害のある人との交流体験には有意な関連はみられなかった。

表4 障害児・者に対するイメージ

質問	初回	最終回	差
Q1 かわいそう	2.85 ± 1.15	2.80 ± 1.31	0.06
Q2 暗い	2.73 ± 1.23	2.85 ± 1.38	-0.14
Q3 怖い	2.77 ± 1.40	2.85 ± 1.41	-0.09
Q4 元気がない	2.77 ± 1.33	2.95 ± 1.45	-0.20
Q5 生活するのが難しい	3.05 ± 1.35	2.91 ± 1.19	0.13
Q6 ひとりでは何もできない	2.83 ± 1.06	2.76 ± 1.21	0.08
Q7 一緒に生活は難しい	2.85 ± 1.20	2.76 ± 1.16	0.10
Q8 自分は障害が無くてよかったと思う	3.23 ± 1.59	3.04 ± 1.48	0.19
Q9 困っているときは助けたい	3.28 ± 1.64	3.15 ± 1.71	0.14
Q10 スポーツをするのはあぶない	2.92 ± 1.20	2.84 ± 1.30	0.09
Q11 一緒にスポーツは難しい	2.88 ± 1.28	2.77 ± 1.37	0.10

Mean ± SD, *:p<.05. スコアが大きいほど、ネガティブなイメージであることを示す。

表5 障害児・者に対するイメージ総得点に影響を及ぼす要因

項目	TotalScore	VIF
性別（1=男性, 2=女性）	-.20 **	1.04
思い浮かべる障害状態	-.03	1.04
障害のある人との交流体験（0=無, 1=有）	.01	1.04
障害のある家族（0=無, 1=有）	-.15 **	1.08
R^2	.07 **	

**p<.01.

表6 自由記述「あなたは『障がい』と聞くと、どのような状態をイメージしますか」の抽出語リスト（上位20件）

初回 抽出語	出現回数	最終回 抽出語	出現回数
人	274	人	212
不自由	152	障害	100
障害	113	不自由	89
生活	104	生活	63
体	104	状態	62
状態	87	体	60
イメージ	64	身体	51
身体	60	思う	44
車椅子	53	車椅子	43
思う	49	動く	34
自分	37	イメージ	32
困難	33	自分	25
難しい	33	少し	25
動く	31	普通	25
持つ	25	持つ	24
必要	25	違う	23
普通	24	想像	20
少し	22	健常	18
違う	21	困難	17
目	21	聞く	17

4) 自由記述の計量テキスト分析

「あなたは『障がい』と聞くと、どのような状態をイメージしますか」について自由記述を求めた結果、得られた回答で出現回数の多い単語を抽出語リストとして表6に、自由記述のうち初回の共起ネットワーク図を図1に、最終回を図2に示し、対応分析の結果を図3に示した。出現回数の多かった語は、初回は「人」(274回)、「不自由」(152回)、「障害」(113回)であり、最終回は「人」(212回)、「不自由」(100回)、「障害」(89回)の順であった。そして、それらの共起関係をみると、初回は大きく2つのサブグラフが形成された。1つは「人」、「不自由」、「障害」、「体」等で形成されるサブグラフ01であり、2つは「生活」、「状態」、「困難」、「難しい」で形成されるサブグラフ02であった(図1)。最終回は大きく3つのサブグラフが

形成された。1つは「人」、「不自由」、「体」、「生活」等で形成されるサブグラフ02であり、2つは「障害」、「身体」、「想像」、「聞く」等で形成されるサブグラフ08であった。3つは、「思う」、「自分」、「変わる」、「授業」等で形成されるサブグラフ01であった(図2)。

対応分析の結果は、初回と最終回の間に、「障害」、「頑張る」、「明るい」、「サポート」等の語句が示された。これらは、双方で頻出の語句であることを表している。一方で、それぞれの両端には、初回には「見た目」、「歩く」、「周り」、「出る」が示され、最終回には「喋る」、「気持ち」、「脳」、「変わる」といった語が示された。これらは各回で特徴的な語として抽出されたものであることを示している。

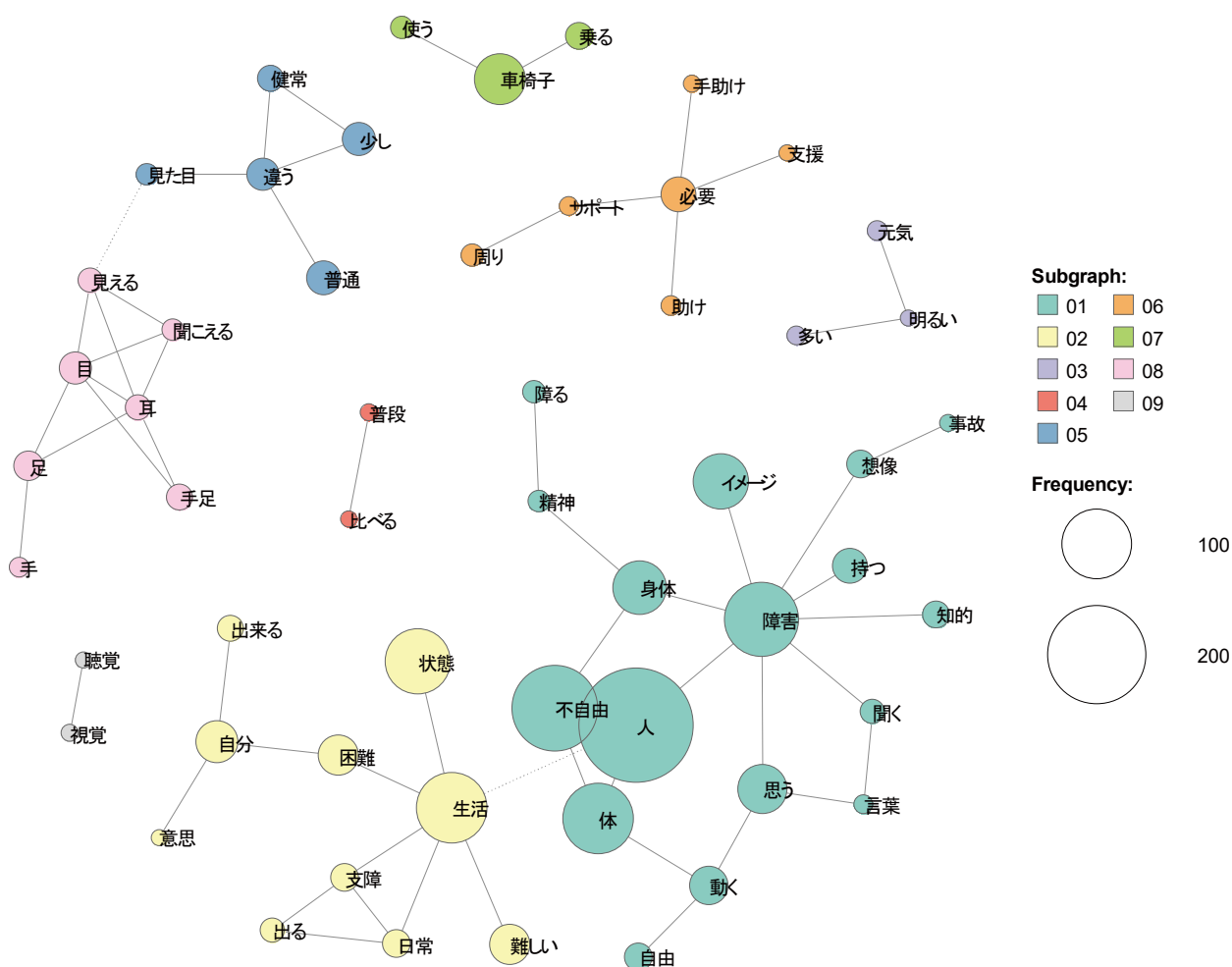


図1 自由記述「障がいと聞くと、どのような状態を思い浮かべるか」における頻出語の共起ネットワーク図(初回)

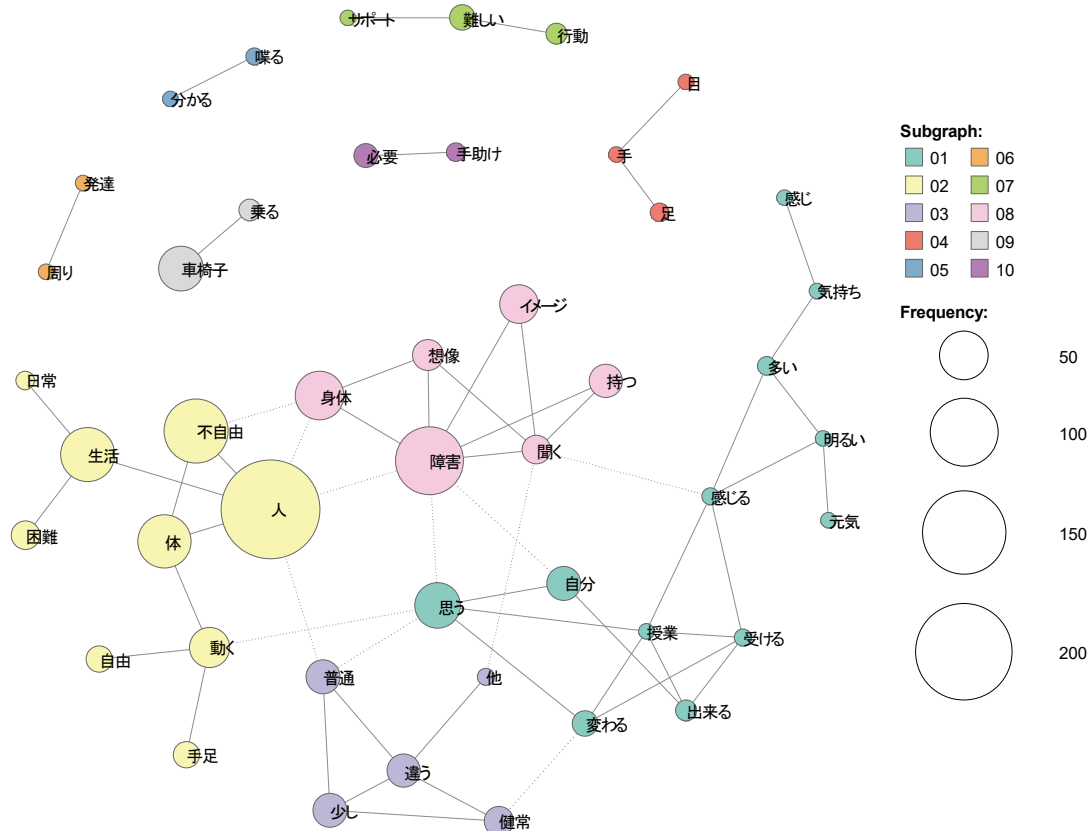


図2 自由記述「障がいと聞くと、どのような状態を思い浮かべるか」における頻出語の共起ネットワーク図（最終回）

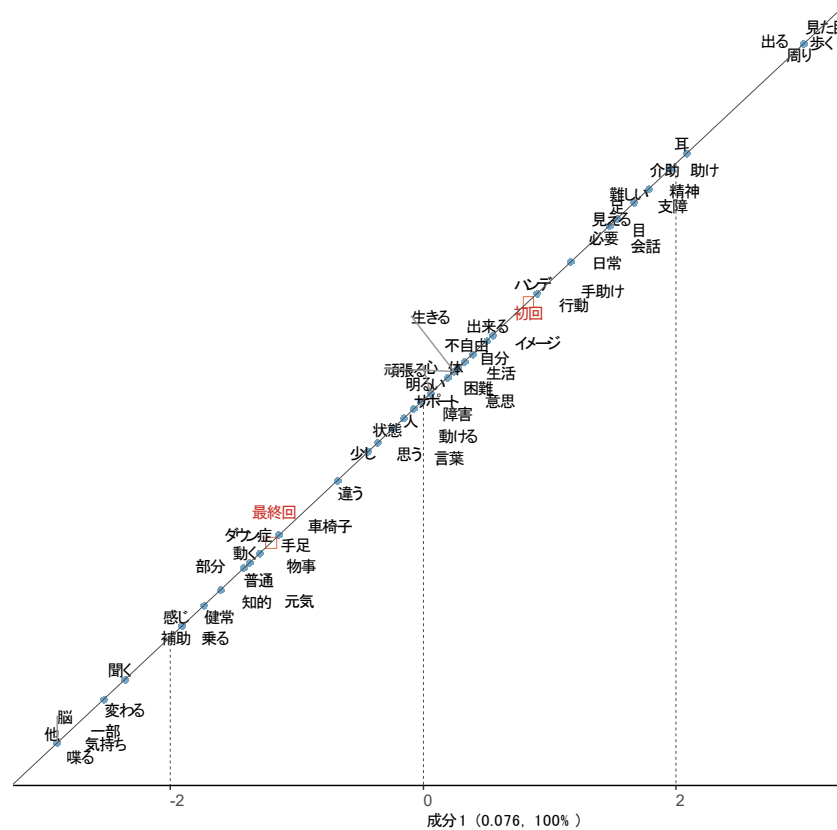


図3 自由記述「障がいと聞くと、どのような状態を思い浮かべるか」における頻出語の対応分析（初回vs最終回）

4. 考察

本研究では、科目「障害児・者福祉」の初回、最終回に行った障害イメージに関するアンケート6年間について分析し、学生が抱く障害イメージに影響を及ぼす要因について検討を行った。

まず、もっとも思い浮かべる障害種別についての回答は、身体障害が最も多く示されたが、授業実施年によってはその比率に動きがみられた。なかでも、2019-2020年の「発達障害」(29%)や、2022年の「知的障害」(16%)の割合が大きな開講年があり、受講生の普段の生活のなかでの関わりや交流経験が反映していること表している。

次いで、障害児・者イメージ得点については、授業の初回と最終回でのスコアに有意な差はみられなかった。このことは、当科目の受講によって障害イメージの向上が起こらなかったということであり、授業改善の必要性を表しているものと考えられる。障害児・者に対するイメージは、授業の履修のよって向上するといった単純なものではなく、障害のある人との接点の有無、関わりの密度等が影響する複雑な対象であることをうかがわせる。特に、重回帰分析の結果、女性のほうが障害に対するネガティブイメージを低くとらえること、障害のある家族がいることが、同じく低減させる要因となっていることが明らかになった。このことは、各家庭・地域での役割や考え方等における性差、家族属性等の影響の強さを示す結果とも考えられる。

そして、自由記述の計量テキスト分析については、授業の初回に比べて、最終回で用いられる語句のほうが多様であった。大学の授業として、語句のみならず、概念や構造といったことについても、情報更新をしていく必要を示す結果と考えられる。履修をした学生が、障害のある人のエンパワメントないし共生社会の担い手として、活躍するための一助となるような教育活動になるように努力していきたいと考えている。

5. 結論

6年間の「障害児・者福祉」のアンケートの分析をととして、学生が抱く障害イメージが多様化していること、各履修生の交流経験等の影響を受けること等が明らかとなった。

謝辞

本研究に協力してくれた科目「障害児・者福祉」の履修学生全員に感謝します。

参考文献

- 1) 河内清彦 (2006). 障害者等との接触経験の質と障害学生との交流に対する健常学生の抵抗感との関連について 障害者への関心度、友人関係、援助行動、ボランティア活動を中心に. *教育心理学研究*, 54(4), 509-521.
- 2) 栗田季佳, 楠見孝 (2010). 「障がい者」表記が身体障害者に対する態度に及ぼす効果—接触経験との関連から—, *教育心理学研究*, 58(2), 129-139.
- 3) 清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案. *メディア・情報・コミュニケーション研究*, 1.
- 4) 杉野昭博 (2007). 障害学: 理論形成と射程. 東京大学出版社.
- 5) 田中真理, 横田晋 (2023). 障害から始まるイノベーション: ニーズをシーズにとらえ直す障害学入門. 北大路書房.
- 6) 野中猛監訳, 河口尚子訳 (2010). マイケル・オリバー, ボブ・サーペイ著, 障害学にもとづくソーシャルワーク: 障害の社会モデル, 金剛出版
- 7) 松井彰彦, 川島聡, 長瀬修編著 (2011). 障害を問い直す. 東洋経済新報社.
- 8) 松本佑介, 齊藤一彦, 藤島廉, 白石智也 (2021). パラリンピック教育が高校生の身体障害者に対するイメージに及ぼす効果の検討: パ

ラアスリートの映像教材を用いた体育授業を事例として. 広島大学大学院人間社会科学研究科
紀要. 教育学研究, 2, 95-104.